

第20回「東書教育賞」の審査を終えて

東書教育賞審査委員会

〔A部門〕

第20回「東書教育賞」を受賞された先生方、おめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。この東書教育賞も今回で20回を迎えます。当初はどの位応募があるだろうかと心配したのですが、それが今、過去最高の280編という多数のご応募をいただくまでになりました。大変感慨深いものがあります。

今回の課題は「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。学力の問題は到達度ではなく学習意欲のことであることがだんだん分かってきたというのが最近の状況だと思います。生き生きと学ぶことができるためには、教師は何ができるかが問われています。

毎回この席でお話しておりますが、審査の基準として共通に重視しましたのは、次の3点でありました。

第一に、実践の結果に基づいて論じられているかという実践性の観点です。これは当然のことと思われるかもしれませんが、中にはこれが感じ取れない論文もあります。別の言葉で言えば単なる理屈がこねられているのではなく、論文中に子ども達の姿が具体的に記述されているかどうかということです。これは非常に重要なポイントでありました。

第二に、実践の中にどのような創意工夫が見られるかという観点です。

第三に、特別な実践ではなく、誰にでも応用できるかどうか。また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分なされているか。つまり、一般性があるかという観点です。あまりに独特な、あまりに特別な条件の下でしかできない実践では駄目であろうということです。

私どもは常にこの3点を構造的に意識しながら審査をしておりますが、これは口で言うほど易しいことではありません。特に創意性と一般性の二つは、時に矛盾いたします。創意性があるからこそ一般性が薄いということはあり得るわけです。逆もまた真でありまして、この点は毎回審査会で論議になります。

その他、論文としての体裁や、テーマと内容が一致しているかどうか、またこれまでの発表の範囲、字数の制限などにももちろん留意して慎重な審査をいたしました。

A部門（教科指導や学校経営に関する実践部門）について審査の結果を発表いたしますと、小学校の部には、154編の応募がございました。この中から、最優秀賞1編、優秀賞3編、特別賞1編、奨励賞6編の計11編を選定いたしました。

小学校の部の最優秀賞には、長野県伊那市立伊那小学校の伊藤道彦先生の「豊かな学びを育む総合学習・総合活動を目指して」が選ばれました。

これは、子ども達が古代の米作りを通していろいろな体験活動を行い、多くのことに気づきながら生き生きと学んでいく姿が見える大変すぐれた実践でございます。

4年生の時に社会見学で「長野歴史館」を見学して、昔の人たちの生活を調べてきた子ども達が、5年生になって古代の人が食べていた米について調べたいと考えます。いろいろと調べていくうちに、自分たちの住む上伊那だけで栽培され、絶滅の危機に瀕している「白毛もち米」という古代米のことを知り、この米を実際に栽培して調べることにします。そして、「なぜ、この地区だけで作られるの

か」「なぜ栽培しなくなったのか」といった多くの疑問を持ち、地区の人たちへの聞き取りやインターネットで調べて、この米の特性や、品種改良・機械化について、また、実際に農作業をしてみても、米作りの大変なことや道具のありがたさを実感し、先人達の苦労や工夫などをいろいろと学んでいます。総合的な学習というものを、一つの素材を基にしなから極めてダイナミックに進めておられることが非常に良く分かる論文でございまして高い評価を受けました。

優秀賞には3点が選ばれました。1点は、三重大学教育学部附属小学校の酒匂秀人先生の「冬に行う運動を子どもが意欲的に取り組む体育学習」です。

日頃から、子ども達に楽しみながらも意欲を持って体育学習に取り組ませたいと願っておられる先生が、雪や氷が無い環境でも、子どもにとって魅力のある雪遊びや、スキー・スケートの楽しさを感じ取らせることができないかと考えて取り組まれた大変ユニークな実践です。靴下を利用した「室内ホッケー」、玉入れの玉を使っての「旗取り合戦」、インラインスキーの靴を使っての「スケートやスキー」など、大変独創的な工夫で、豊かな写真も添えられており、私達も楽しく読ませていただきました。子ども達は、その運動を楽しむ中で、教具の改善やルール作り、作戦の工夫などを行っています。一般性もあり、創造性に満ちた躍動感のある実践が評価されました。

優秀賞のもう1点は、鳥取県岩美郡岩美町立岩美北小学校の三谷祐児先生の「五七五のリズムを国語の授業に生かす」です。

この実践は、国語学力の低下が指摘される中で、五七五のリズムを巧みに取り入れ、子どもの文章表現力を向上させる工夫を行ったものです。

教科書の教材を学習した後、その感想を「五七五」を使ってまとめますが、そこで初

めから、俳句のモデルを見せるのではなく、まず「五七」や「七五」の部分を作り、残りの5文字を考えるとという指導をなさっています。子ども達は構えることなく簡単に文章を作っています。また、学校全体でも、3分間で100文字前後の作文を書く「100ます作文」を計画し、15年度からは、2年生以上に週1回実施し、各学期の終わりにまとまった作文を書かせておられます。日本語のように音節で成り立っている言語の特性を極めてよく掴んだうえで、子ども達に文章を書く力を育てていることがよく分かるすばらしい実践です。

優秀賞のもう1点は、富山市立奥田小学校の吉野智子先生の「対話活動を通して伝え合う力を育てる授業―『自慢の車』を伝え合おう」です。

この実践は、「読み・書き」の能力が十分に育っていない1年生に「対話活動」を通してコミュニケーションの能力を高めるとともに、学校生活を一層楽しいものにしていこうとする実践です。

子ども達は「自動車」という興味深い例を使って1対1の対話を楽しんでいます。また、図工の時間に作った「自分の自動車」について自慢し合ったり、自分や友達の自動車の良いところを文章に表したりしています。このような活動を通して確実に「話す・聞く力」や、文章を書いたり、読み取ったりする力が育成され、コミュニケーション能力が育っていることがよくわかる実践でした。

以上、最優秀賞、優秀賞を得られました論文について申し上げましたが、この他に、奨励賞として小学校の部で7編を選定いたしました。その中で、今回は、日頃から地道ながら大変良い実践を行っておられる、山形県長井市立伊佐沢小学校の浅田千嘉子先生の「学校・家庭・地域で自尊感情を育てる『未来21学習』の工夫」に、特別賞を贈ることとした

しました。

いずれの論文を拝見いたしましても、今現場の先生方が、子ども達にしっかりとした基礎的・基本的学力を身につけさせることに、いかに苦心なさっているかがわかります。他方、一人ひとりの先生が、第一線で子ども達を前にして、いろいろと創意工夫をして独自の指導技法を編み出しておられるということ、をはっきり読み取ることができました。

どうか、東書教育賞に応募されたこの経験をこれからも生かしていただき、日常の授業の中で、一人でも多くの子どもの、学ぶことの楽しさ・面白さを味わわせて頂くことを期待し、いっそうのご研鑽を期待いたしまして、審査概要説明の結びといたします。

昨今、学力の低下が話題となっておりますが、私が理事長をいたしております「中央教育研究所」でも、これまで学力問題に関しまして数年間の研究を積み上げてまいりました。

総合的な学習が始まる2年前のことでしたが、学習指導要領を待たずとも総合的な学習をなさっていた15校の小・中学校の先生方に長時間にわたるヒアリング調査をさせていただいて、総合的な学習の時間がどのようなチャンスをもつ日本の子供達に与えるであろうかというテーマで検討させていただきました。

それを発表した後、今度は、社会人にとって大事な学力とは何か、学校への期待は何か、学校時代の勉強の中で、今一番生きるために役に立っていることは何か等を、約3年にわたってヒアリング調査をさせていただきました。対象は、大都市圏、及びその周辺におられる会社員や、現場で働いている職人さん達、サービス業に従事している方々等で、様々な職業の方にお話をうかがい、データを積み上げてきたわけです。幸いこれらの調査は評判を呼びまして、色々なところに紹介されたので、ご覧になった先生方も多いと思います。

これらの結果を眺めて見ますと、私個人といたしましては、今の指導要領の中に、教科の学習という系列と、自分の課題を持って学習するという系列との、この二つが並存することになっているのは極めて貴重なことだと思っています。

いったい人間が学ぶとはどういうことかという、それには二つの学び方があるに違いない、一つは既に決まった知識、決まった知の体系をきちんと教えるということで、いわゆる教科の学習がそれにあたります。二つ目は自ら興味・関心・課題を持って、自分達で切り開いていく学習であり、これが日本の教育には極めて欠けていたと思います。しかし今の学習指導要領の中では、この二つを並列するようになった。原則的に極めて進んだ構造をもつカリキュラムだと思っています。ところがそれが変わるかもしれない。私には理解できません。

先日、確か文部科学大臣が、ご自分で「総合的な学習の時間」は減らすと話されました。私はこれまで、カリキュラムの改訂は教育課程審議会で審議をして行われるものだと思っておりました。その前にああいう形で突然発表されていいのでしょうか。ああいうやり方は政治的に言えば方針転換と言うのでしょうか、普通に言えば、右往左往というのにあたります。右往左往で動かされていったら現場は堪らない。

総合的な学習の中で、せっかく良い実践が積み重ねられてきて、わずか3年にならないところで方針が変わるのはおかしいと思います。そういう点からみましても、「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」という課題に寄せられました沢山の報告の中に、先生方の子ども達の目を見る確かさ、じっくり積み上げてゆっくり育てていこうという姿勢を見ることができましたことを、ことさらに、大変うれしく感じた次第であります。

(寺崎昌男)

(B部門)

成人式にもあたる第20回の東書教育賞に受賞された先生方、おめでとうございます。

B部門は、情報通信メディアの活用の部門でございます。ご存知のように、情報通信メディアの活用につきましては、今、世界中の国々が教育の中心課題として真剣に取り組んでいるところです。去年から今年にかけて色々な国の状況を見てまいりましたが、東ヨーロッパでもイスラム圏も、中央アジアでも東南アジアでも、ICT（情報通信メディア）の活用に国策として力を注いでおります。先々週に行ったイギリスでは、教育技能大臣は30才の若い女性なのですが、情報通信メディア関係の会の講演で、始めから終わりまで3、40分ですけれども、全部情報通信メディアの活用がいかに大事かということをお話していました。私が今関係しております日本教育工学振興会は、教育工学、教育メディアの活用を推進する活動を行っておりますが、イギリスにも同様の団体があって、情報を使ったコミュニケーション能力や問題解決能力を育て、同時に教科の学力も育てるための、教科ごとの立派なパッケージを作って皆さんに配るようなことをしています。また、面白いのはNCSL（National College for School Leadership）といって、教頭先生、校長先生、その上のコンサルタント、管理者になりかけの人などに対して研修を行い、免状を出すというプログラムを国の機関で行っています。その特別プログラムのなかに、SLICTという校長先生のICT能力の開発を行うなどのプログラムもあり、情報通信活用部門に力を入れて管理者へのICTの教育が大事であるということを一生懸命やっています。イギリスの大臣は、講演の冒頭で、今やITは当たり前の基礎能力で、今更議論することもないと言っていました。その他に、イギリスはTV教育というCSチャンネルを作って、24時間教師教育をやっています。民放にチャンネル4と

いうのがあって、教育放送を義務づけるなど、真剣に教育に取り組んでいます。ちょっと面白いアイデアだと思ったのは、ITユーザーのスキルフレームワークというのを考えて、それに基づいてパスポートを出しています。ヨーロッパでは、コンピュータ・ドライバーズ・ライセンスというのがあるが、個人のを能力認証していこうという位にITの能力を教育の中で重要視しはじめています。日本ではどうかというと、日本も頑張っています。Eジャパン戦略IIといって、去年、重点計画2004というのが出ました。教育でのICTの利用を一生懸命やりましょうと言っているのですが、そこでねらった目標は、あと1年たったら100%の学校の各教室からネットワークにつながるとか、100%の先生がICTを使って学習指導ができるというものなのですが、ところがまだ60%ほどの先生しか使いこなさないし、各教室のコンピュータの普及率は20%です。そのような状況なのに、あと1年で目標を達成できるのかと大変心配です。二千五十億というお金を地方交付税で出していますが、IT教育にいかないで他に使われてしまっています。岐阜県のように80%、鹿児島市や郡山市のように100%の学校の各教室からネットワークがつながっているところもあれば0%のところもある。東京都は8.3%しかつながっていない。東京、大阪といった大都市は非常に遅れており、こんなに差があってもいいのかと思います。今、企業に就職するときにITの能力と語学の能力と、コミュニケーションの能力を持った、即戦力のある人間をくれよというときに、一つの大学でそれを育てられないから、学生の方で専修学校に入り直すというのが1割近くいるのです。日本の将来、世界と比べて危ないなと思います。ではどうしたらいいかということで、その格差を是正しようと内閣府を中心に躍起になって頑張ってくれてはいるのですが、教育委員会のほうの意識がもう一つ。何が必要かという

と、これだけ効果があがりましたよ、素晴らしい実践が進んでいますよという例を見せて、議会だとか保護者だとかを説得しなくてはいけない。教育委員会はそれを見せなくてはいけない。今回の東書教育賞の受賞論文の中に、その成功例が出て参りました。

B部門でございしますが、応募は残念ながら23編と、前回の33編から減ってしまいました。B部門は、A部門と共通の審査基準に加えて、情報通信メディアが有効に使われているかということにポイントをおきますから、A部門でもITを使うのが当たり前になってくると、B部門にふさわしい新機軸の工夫がなかなか出てききたいということで減ってきているのではないかと、それは逆に普及してきたことの裏返しじゃないかという気がしているわけです。

今回は、残念ながら最優秀賞はございませんでしたが、優秀賞2編、奨励賞1編を選出いたしました。

優秀賞の一つは愛知県岡崎市立北中学校の森竜師先生の「開かれた学校をめざす情報通信ネットワークの構築」です。学校を開くということは、地域と家庭に学校を開いていくということで、常々「北中だより」という新聞で日常の活動をやっておられます。それにネットワークが入ってくるということになるわけです。新聞を配るという事のほかにホームページ等で情報を流すわけですが、72%の家庭がパソコンを持っていて、ネット接続は半分以上というインフラの状況の中で、実践が行われております。いわゆる学校だよりというのは文章にして紙にして配りますから、普通ですと月に2回位あればいいのですが、Webにしましたら毎日新しい情報を載せていらっしやる。たいへんなことだと思います。大きな組織でも毎日新しい情報を載せるのは大変なことなのですが、学校の先生が二人ペアになって日直制、教頭・校長先生が管理し

て、教務が休みの担当ということで、全員がWebのページを作る、私はパソコン苦手だなんて言われていられないわけで、そういう先生も作る。そんな凄いことが起こっております。学校行事であるとか、家庭の方々に関心がある学校の活動というものが絶えず出てきますし、緊急になにかが起ったらWebですぐに連絡がとれる。1年間に10万件以上のアクセスがあったということです。書き込みができる掲示板を使って、保護者が色々な行事のあと感動したというような感想を書き込んだりされている。ITならでこそできる地域・学校・家庭の交流が起り、そして学校が開かれていくという実践でございました。

もう一つの優秀賞は、鳥取県倉吉市立灘手小学校の山脇隆史先生の「自分を見つめる心を育むIT活用の実践」です。自分を見つめる、自分を振り返る、自分自身の活動を何かを鏡にして見るわけです。知的な行動とか心というものは、自分が書いた文章とか自分が行った活動の写真とかを鏡にして、このときはどうだった、こうしたらいいかと振り返りをしますが、そのための材料として作文や手紙などに加えてITをお使いになる。これは6年生の実践ですが、1年間を準備期、実践期、仕上げ期に分けます。準備期はITのスキルを鍛えますが、8名のクラスということで行き届いた指導をされたので、ほとんどうまくいきました。実践期というのは9月から12月の学校行事等が色々あるところで、そういう行事のなかを通して、Web学級日誌を書いて自分の行事への参画だとか、感想だとかを振り返って書く。仕上げ期には1年間の活動を振り返って、Web学級日誌に蓄積した生活の記録とか取材した写真とかを集めて卒業文集を作る。このように自分の行動や心の動きを文章にして、写真と一緒にしてまとめてそれを振り返る反省の種としてITをお使いになった。

とかくITというのは一方的にものごと

というけれど、この二つの実践は、家庭との双方向の交流であったり、自分の心を投影するときの道具としてITを活用し、自分を振り返って自分を成長させていくということに使われているのが特色でございます。

今までのような当たり前に使っているのは違った種類のユニークな活動がでてきているので、先生方にこういう論文でないと応募できないという印象が多少あるのかなという気がしておりますが、ICTを使ってコミュニケーション能力を高めたり、自己反省のために使ったりと、こういう使い方がどんどん当たり前に広まっていきつつあるし、いって欲しいと思います。また同時に教科の学力を向上させるための良い実践工夫がこれからでてくれるといいと思っております。

私ども人数が少ない審査員でございますが、慎重に審査させていただいて、それぞれ学ぶところが多かったことを応募された皆様方にお礼申し上げます。 (坂元 昂)

審査委員の講評・所感

[奥田真丈]

審査の内容につきましては、委員長が申しました通りでございますので私は、別の話をしたいと思います。

一つは先生方、身を持って感じておられることと思いますが、21世紀になってから改革、改革という声ばかりが大きくて、その行き先がどうなるかということについては、現場の先生方に不安をもたらしているのではないかとそんな気がしてならないのです。ぜひ声の大きいことに負けないで、自分も声を大きくして21世紀の教育を背負って立とうという気持ちになっていただきたい。色々な方策があると思いますが、基礎になる考え方、別な言葉で言いますと理念とか哲学とか言われておりますが、一人一人の先生が、なぜ改めなければならないか、どこをどうするかということについて理念、哲学を持っていただきたいと思っております。先生方の前に東京書籍のアイデンティティを記したボードが掲げられていますが、これは非常に良いことを言っていると思っております。以前から注目しておりました。「教育と文化を通じて人づくり」、「広い視野と豊かな感性で時代に先駆けるたえまない挑戦と自己改革」、「すべての人々に健やかな知的生活を」、一つ一つ皆意味があることだと思います。ぜひ先生方にも参考にさせていただいて、学校ではこういう理念をもって、あるいは一人一人の先生方はこういう考え方というように、しっかりしたものを持っていただければ幸いに思います。

私は、なんと申しましても、教育は実践あるのみと思っております。これは私の哲学です。実践で先生方の考えが本当に成果をあげたかを示していただきたいと思っております。世間の評判を得て良い悪いということではありません。子ども達が、本当に先生方が期待しているように、身に付けたかどうかを、先生方の実践を通じて実現していただければ幸いと

思っております。

しっかりした考えを持つということ、そしてもう一つは実践あるのみということを考えていただきたいと思っております。

〔小野具彦〕

初めて審査員をさせていただきました。受賞された先生方、誠におめでとうございます。私は中学校にずっと関わってきましたので、中学校についての話をさせていただきたいと思えます。中学校の先生方からの応募が年々増えているということを非常にうれしく思います。と申しますのは、小学校も勿論ですが、今回の教育改革のさなかにあって学校現場は極めて多忙感に満ち満ちているというのが現状だと思います。私も昨年まで校長でしたので、それをひしひしと感じてまいりました。そうしたなかにあって先生方は、当面する課題解決に留まることなく、たゆまぬ精神的そして研究的な実践を行なって、それらを極めて簡潔にまとめられました。そのご努力に対しまして、心より敬意を表したいと思えます。せっかくの機会ですので、今までの繰り返しの部分はあると思えますが、私からも感想を述べさせていただきたいと思えます。

最優秀賞の岡田多恵子先生の実践は、同僚の出産という機会を生かして、教師・医師・家族が一体となり、明確な意図をもって指導された様子が良く分かる実践でした。今、子ども達の生命に対する意識が極めて大きな問題化しております。生命の尊さを感動的に実感させた実践というもの非常に尊いと思えます。いつどここの学校でも誰でも行なえる事例ではありませんが、たいへん多くの視野を与えてくださっています。高く評価できる素晴らしい授業実践であると思えます。

次に優秀賞の河原和之先生の実践ですが、これは地域の企業商店の協力を得て36店舗を設け、販売を通した活動を学習活動としています。とてもユニークな実践だと思えました。

また、その中で提言活動を行なっていますが、これも単なる発表活動では得られない、たいへんパワフルな活動をしていると感心いたしました。学校の地域性を生かした意欲的な実践でした。

八田秀樹先生の実践は、指導手順がたいへん細やかです。計画が、的確なレベルの高い授業実践だと思います。この実践は英語の選択教科における発展学習のモデルとして、他校の実践にも活かせるものであります。

安村晃一先生の実践ですが、二酸化炭素の削減は、今や世界的な問題となっています。先生の並々ならぬ熱意がひしひしと伝わってまいります。優れた環境学習であると思えました。意図的・計画的に行われた取り組みは、選択教科の学習としてだけでなく、総合的な学習の時間のモデルとしても多くの内容を含んでいると思えました。これも多くの学校に広がって欲しいと思う実践でした。これらの実践の成果が冊子になって全国に広められるわけですが、これを参考にされより発展的な実践が広がっていくことを期待しています。

〔多湖 輝〕

私も第1回から審査員をさせていただいております。私はいつも一つ一つの論文についての論評というのをいたしませんで、勝手にそのとき自分が感じていることを申し上げてきました。今我々がたいへん問題意識を持っておりますのは日本の家庭の問題です。家庭がどうなっているのか、これは非常に根の深い問題であります。家庭のしつけの問題では、箸の持ち方すら教えないし、鉛筆の持ち方も教えない、不思議な親が沢山現れておまして、我々は非常に憂慮しております。それから、身体の問題もあります。先日、日本サッカー協会のキャプテンの川淵三郎氏と話をしましたら、サッカー協会は幼稚園児を対象に、足の裏の調査を本格的に始めたのだそうです。足の裏の研究というのは今までも行

なわれていましたが、協会が始めた理由は、ほとんどの子どもが偏平足であり、浮き指の子がどんどん増えていることに憂慮したためです。浮き指というのは、足の指が全部床に着かない状態で、3本とか、ひどい子どもになると4本つかないのです。その原因は、川淵氏に言わせると駆け回ってないからなのだそうです。駆け回ってれば、どこかで急に止まらなければいけない。そのとき、足の指先で土をしっかりとつかむわけです。このつかむ能力が無いと、運動だけではなく、腰がだめになる。腰がだめということは、姿勢が悪くなる。これが全身に悪影響をあたえます。浮き指の比率はどんどん増えており、最近の調査では60パーセントを超えているということです。これは由々しき問題で、彼は大変な危機感をもっておりました。

それから、学校教育の一つの大きなポイントというのは人間力です。生きる力と言われていますが、人間としてどういう力を持っていないとこれからの世の中生きていけないかという人間力です。私の教え子が皆校長になっておりますので、時々集めてはっぱをかけておりますが、今は難しいです。例えば今日イラクの選挙が行なわれますが、ああいう問題をどう扱うかなんていうのは大変な広い知識を持っていないとできないです。パレスチナ、イスラエルの問題にしても、現地に自分で行ってみて初めて、こういう所でこういう考え方の人がいるかというふうにびっくりします。NHKの教育テレビで、戦争が終わった年、昭和20年をどういうふう感じながら生きてきたかという番組があって、明日その取材を受けることになっています。私は終戦の時には大人になっていて、大人目でそれを見てきた。大正デモクラシーの自由な雰囲気の中で育った私たちは、軍部が次第に力を持ち戦争に突入して敗戦になった、そういういきさつを結構冷めた目で見えてきたつもりです。そういう中での60周年を迎えて、今年は

いろんな意味で価値観の見直しということをやらなければいけないと思ひまして、いろんな先生方、いろんな人たちとどういうふうにするのだと議論しあっています。民主主義と云ってアメリカ主導だけでいいのか、という議論も当然あります。じゃあ国連でいいじゃないかといいますが、加盟国のすべてが1票を行使するようなスタイルにしたらとんでもないことです。国連の費用も出せない小さな国から大国まで、すべて入っているわけで、結局5大国がイニシアティブを握って、しかも1国が反対したら全部無しというルールを作っているわけです。国連がどうのこうのというのですが、それすら非常に難しい。先生方一人一人が信念と信条をもって教育にあたられる、それは当然なのですが、学校という組織、日本国という組織、世界の中の人類の一翼を担っているわけで、その中で、どういう人間力が要求されているのか。そんなことを考え出すと、私なんかそう簡単に割り切ってこちらに進もうなんて号令かけることは難しい。そんな中で、子ども達だって揺れているわけです。いろんな考え方があり、いろんな情報が入ってくる、今やその情報をカットするとか、マスコミをセーブさせるとかそんなことはできません。ですから子ども達にいろんな考え方をどう受け止めて、それを自分なりにどう評価し消化できるか、それはまさに先ほどから言っている人間力そのものなのです。学力の低下も問題になっていますが、人間としての力をどうやって子ども達につけていくのか、そこがこれからの教育の大問題になってくるだろうと思うのです。

日本は良い物を沢山持っていたのに、それを惜しげもなく捨ててきたことに対する反省もいろんなところで聞かれるようになってきました。これから正念場に入るのはないかと思ひます。日本では、新潟の大震災、海外ではスマトラ島沖の震災とあの津波、去年は本当に大変でした。それにしても、日本の

国際感覚の無さにはあきれるばかりです。その後各国の大使館などは、半旗を掲げておりました。あれだけの多数の方々の死と大被害を悼むという人間としてのハートがないのか、いくら金を出すかという話ばかりに行ってしまう。日本全体が少しおかしくなっているのではないか。これを立て直すのは教育以外に無いです。教育の世界で、本当の意味で世界に通用する人間をどうやって作っていくか、ぜひ先生方、健康に十分気をつけてがんばっていただきたいと思います。

〔三上裕三〕

私は、小学校を主として感想を述べさせていただきます。東書教育賞は、今回、第20回という記念の年を迎えました。小学校部門の応募数は昨年よりかなり増えたということでありたいへん喜ばしい傾向だと思っております。教科等をみますと国語・算数・総合の順に応募数が多く、この3つで全体の6割を占めたということです。今、先生方は学校改革の真ただ中にありますけれども、学校現場で日々教育実践に熱心に当たっておられることを物語っているのではないかと思います。

では、受賞されました論文について、ふれさせていただきますと思います。最優秀賞の伊藤道彦先生の論文は、子どもが内から学びを獲得していく過程が良く分かる素晴らしい教育実践だと思えます。古代から作られていたと言われる「白毛もち米」の栽培・収穫・もちつきまで、実際の活動を通して子ども達が五感をフルに働かせて、多くのことを学んでいく、その様子が良く分かる論文だと思えます。特に子ども達が稲刈りをする部分で紹介されておりましたが、子ども達が鎌を持って実際に稲を刈る様子、ザクツという音と手応え、恐らく機械ではこういうものを感じることはできないのではないかと思います。弱音を吐かないで一生懸命世話をして、ここまで育て上げて本当に良かったと子ども達の

感動体験が読むものにも伝わってくるような素晴らしい実践でした。子ども達は自分が生まれ育った地域、自然とか社会、地域の人々に対する愛着や畏敬の念、そういったものも同時に生まれ、総合的な学習を通して、子どもの心を育てる素晴らしい実践だったと思えます。多湖先生からお話がありましたけれど、まさに子どもの人間力を育てる実践につながったのではないかと思います。先生には、ぜひ今後とも新たな題材で研究していただきたいと思えます。

優秀賞を受賞された、酒匂先生、三谷先生、吉野先生おめでとうございます。その中で、三谷先生の実践は、アイデアに富んだユニークな実践だったと思えます。授業を終わったあとの感想を短い言葉でまとめさせたり、段落の要旨を五七五でまとめさせたり、あるいは俳句の作り方とか句会の指導、百ます作文、文章表現の指導など、先生が永年求めてこられた、書くことを通して美意識を育てることを実践を通して実現されたのではないかと思います。先生の実践はどこの学校、またどなたでも行なうことができ、一般化できる実践であったと思えます。

特別賞を受賞された浅田千嘉子先生の実践ですが、先生は養護教諭という立場から子どもの現状をつぶさにご覧になって、常々いかにして子ども達に自尊感情を育てたら良いかという課題意識を持っておられました。これをテーマに学校・家庭・地域をあげて取り組みました。養護教諭の先生の職務を遥かに超える大きなテーマで、これは学校経営の視点から見ても今非常に大事なテーマであると思えます。今後一層この実践が深まることを期待しております。先生方にはこれまでの尊い実践を踏まえて更に奥の深い教育実践が積み重ねられますことを期待して感想とさせていただきます。

〔赤堀侃司〕

私どもの情報通信メディア活用部門では、坂元先生のお話にもありましたように、それぞれ大変優れた実践をされたということに敬意を表したいと思います。特に今回はWebや掲示板に関する実践というのが共通していたように思います。電子メールや掲示板は非常に日常的になってきました。ITという道具はもはや無くてはならない道具でありまして、どうやって活用していくかということが大変重要になると思います。これはB部門だけではなく、A部門の方でも良く使われているということを知りますので、ぜひこういう実践を積み重ねていただければと思います。ある高校生が自分の体験した赤裸々な体験を小説にし、それを携帯を使ってメールで配信したところ、大変な評判になったそうです。私も先般海外に行っておりまして、外国から自分の家族の携帯にメールを送りました。それほど私たちの生活の中に日常的に入ってくると、インターネット人口がどれほど広がっているか分からないぐらい膨大なネットワークを作っている、そういう社会がここに到来しているということを感じるわけです。感じれば感じるほど、ITの持っている色々な意味合いというものを考えざるを得ないということもいつも感じております。自分にとってPCは無くてはならない道具でありますから、海外でもどこでも持っていきますし、持たないと不安になります。そういう点は、私も一種の病気かなとも思いますが現代はそのぐらいでないと生きていけないというのも事実なのです。今回の実践の素晴らしさというのは、先生方が非常にうまく指導しておられる点だろうと思うのです。我々の身体の中に入ってきた道具をどうやって使ったらいいのが大変重要な教育の課題になってきていると思います。他の専門家も、これは単なる道具ではない、身体化された道具である、身体の一部であると言っています。私もそう思い

ます。無くては身体が機能しない、生きていけない、身体の中に入り込んできたこの道具を、どうやって使えばいいのか。ある人は、これはちょうど薬のようなものだと思います。薬には医者というライセンスを持った専門家がいて、正しい薬の使い方、正しい医療の扱い方、健康を保つにはどうしたらいいかということなどを日々研究して教えている。同じように今のIT社会は、この道具が私たちの身体の一部であればあるほど、それをどうやって使うかという研究をしなくてははいけません。情報教育が一つの非常に大きな分野を形成しつつあるわけです。高校生に携帯を持たせないで1週間生活させた実験では、どうなったかということ、震えて居ても立ってもいられなくなる、いわば禁断症状みたいなものが出たというのです。本格的に情報の正しい扱い方を教育する時期に来ているのではないのでしょうか。薬が無ければ、私たちは生きていきません。医者にかからない健康な人というのはまずいないはずで。これほど溢れるような情報社会に生きている私たちが、これが無くして生きていけないとするならば、正しく使える専門家が必要でありましょう。今の時点では学校教育にそこが求められているわけです。今回受賞された作品を見させていただくと、OBや保護者が掲示板に入って、なるほどこんなふうにして子ども達がんばっているのかとメッセージや応援を送ったり、自分をもう一度振り返るための日誌として使ったりしていますが、一步間違えば、それをほったらかしにすれば大変なことになるわけです。情報社会における、医者と同じような情報の専門家が求められているとつくづく感じます。今回の論文の素晴らしさというのは、それを専門家である教員が、教育という目で正しい使い方を示していただいた、そこにあると思っております。技術の進展が非常に早く、私たちはむしろ躊躇しているところがあると思いますが、躊躇する時期ではもはやありませ

ん。万民にこれだけ普及し、小学生でも携帯を持つような時代になるとすれば、どうしても学校教育、家庭教育の中で正しく使えるあり方というものを積み重ねていく必要があると感じているわけです。そういう点で、優れた論文を提出していただいたことに感謝を申し上げます。

〔堀口秀嗣〕

B部門の二つの論文について簡単にコメントをさせていただきます。まず、森竜師先生の論文ですが、家庭や地域との連携を工夫されている点、大変良いことだと思います。とかく学校の中だけで情報というのを取り組みがちですが、その結果を外に出していく、ばらばらになりがちな学校全体で情報発信に取り組まれている姿は素晴らしいと思います。昨年の悲しい佐世保事件以来、情報安全教育ということが、注目をあびるようになってきました。ある意味では両刃の剣であるような情報通信手段、ICTが本当の意味で活用されていくために情報発信とか家庭との連携というものを役立てていただけたらと思っています。それから、山脇先生の実践ですが、大変素晴らしいと思いました。特に日常的なICTを、年間指導計画に位置付けて活用されているのは、なかなか他の学校では真似ができないところだと思います。2005年の終わりまでに、つまり来年までに概ね全ての先生がICT活用をするということが、Eジャパン戦略のなかでも謳われていますが、そのことを具体化するためには、やはり年間指導計画に書き入れない限り、使えるところで使うという発想ではしっかりと定着はしないと思っています。ぜひそういう意味でも他の学校が参考にしていただきたいと思うわけです。こういう活動がどれだけ子ども達のデジタル・コミュニケーション力のアップにつながったのかというあたりをぜひ定量的に出していただいて、本当の意味で子どもの力がついてい

ますよというものにしていただけたら良いのではないかと思っています。私自身、常日頃言っていることの一つに、情報体力という言葉があります。一般の体力に瞬発力と持久力があるように、情報体力にもやはり、短時間で何かができるという情報瞬発力と、忍耐強く、なかなか見つからなくても見つけ続けられるような、長時間にわたる体力、すなわち情報持久力が必要になっていると思います。この力を育てない限りは、うまく使ったというだけでは情報教育としては不十分だと思われるものですから、そういう体力につながるような実践を続けていただきながら、それを定量的にも示していただけたらうれしいと思っています。ご存知のように日本は、2001年1月6日にIT基本法を施行して、わが国を世界で最先端のIT国家にすることを宣言し、IT戦略本部を設置して進めようとしています。取り上げられた項目がちゃんと具体化されたかどうかをきちんとチェックしながら、1年1年を進めようとしています。これほど本気になって頑張らないといけない状況になってきている日本を、先生方もぜひそういう立場からご覧いただいて、学校ではどういふふうを活用していくか、それによってどういふ力を子ども達に育てていくか、人材育成という観点からもぜひお考えいただきたいと思います。赤堀先生が身体化という大変特徴的な言葉を使われました。私も人間の能力というのは、人間の裸の脳とそれからICTとを組み合わせたトータルの力というふうに考えておりまして、このトータルの力をどれだけ高めるかということが大事だと思うのです。もちろん裸の脳を鍛えることも大事ですが、1たす1が2以上になるように、ICTプラス人間の脳の力で、トータルで人間のパワーアップを図っていききたい。そうなるように情報教育をお願いしたいと思います。昨今の学力低下の議論はなかなか悲しいものがありますし、総合的な学習の時間数の問題も言い

たい事は山ほどありますけれど、確かな学力という、今まで確固たる定量的な情報はないけれど、思考力・判断力・表現力・コミュニケーション力、そういった力を含めたトータルな力が低下したなら、これは憂慮すべきことだと思います。知識の量とか問題に正解できるという力だけを高めようとされずに、ぜひトータルな確かな学力を高められるように学校で取り組んでいただきたいと思っています。

〔高桑康雄〕

今回は第20回ということで、これまで以上に多くの実践論文が寄せられました。全体としてみたとき、私には中学校の方に魅力的な論文が多く集まったように思われました。といっても、小学校にも注目すべき報告がなかったわけではありません。特に最優秀賞を受けられた伊藤道彦先生の論文は、きわめて優れた論文だと思いました。すでに全国的にも有名な、伝統ある実践を重ねてきた学校であるだけに、その伝統をふまえて、しかもご自身の実践を着実に進め、しかもその要点を的確に文章にまとめることはなかなか容易ではないと思われますが、伊藤先生はそれを見事にこの論文の中で示してくださっています。白毛もち米を手がかりに、それを育て、さらにそのことをめぐって多くの人々とのふれ合いを経験させるという学習活動が、子ども達に大きな力を育てたことを、読む者によくわからせてくれています。ここに総合的な学習の時間のすばらしい事例を見ることができるように思いました。

優秀賞をお受けになった先生方も、それぞれ優れた実践を報告してくださっていますが、私は吉野智子先生の国語の実践に魅かれました。1年生の国語の授業として、「いいたい」「ききたい」を子ども達の「自慢の車」からうまく引き出しているのが大変成功しているのだと思います。また同じく優秀賞の三

谷祐児先生の実践も興味深く思いました。国語の学習に「五七五」という日本人が慣れ親しんだリズムを梃子として生かすことは、子ども達の意欲の盛り上げに有効でしょう。

中学校の方では最優秀賞の岡田多恵子先生たちの論文が、具体的な実践に沿って、はっきりした指導意図のもと、先生方の協力と地域の関係者の連携によって、りっぱに成果をあげていることを感動的に語っています。この指導は決して一人の教師の努力だけでなく、また教師だけの力だけでなく、多くの関係者、妊娠から出産に至った当の先生を中心として、医療の専門家を含めた地域の人々の善意と意欲によって、初めて達成されたのだという事実が十分に分かります。もう一つのグループでの応募で坂本緑先生達の実践も、先生方の苦心のあとがよくまとめられて優れていると思いました。特別賞の名に値する論文だと信じます。トイレ清掃をどうするかを生徒会活動の一環として、また保健衛生の側面を捉えた、学校教育の大事な課題に取り組んでいるからです。とにかく毎年優れた実践論文を読ませていただき、ありがとうございます。お礼を申し上げます。(原稿)

〔杉山吉茂〕

いい作品ばかりであった。差があるとしてもほんの少しである。レベルが向上していることは慶ばしいことである。

ただ、価値ある実践であろうことは想像されても、それが伝えられていない作品があるのはおしい。賞の中に入らなかったものの中にはそのようなものが含まれていた。単なる記録、事実の羅列でなく、読んでいて感動が伝わるようなまとめ方を工夫していただけたらと思う。論文として、お話として楽しく読めるようなまとめ方をしていただければ、これからの人に受け継がれるものとなる。(原稿)